高　等　学　校

平成２６年度

教育研究員研究報告書

商　　業

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由　……………………………………1

Ⅱ　研究の視点　…………………………………………………1

Ⅲ　研究の仮説　…………………………………………………2

Ⅳ　研究の方法　…………………………………………………2

Ⅴ　研究の内容　…………………………………………………3

Ⅵ　研究の成果　………………………………………………２３

Ⅶ　今後の課題　………………………………………………２３

研 究 主 題	自らの考えを導き出し表現する学習活動とその評価方法の工夫

Ⅰ　研究主題設定の理由

高等学校学習指導要領では、改訂の基本方針として、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視することが明記されている。具体的には、各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動の充実が求められている。

東京都教育研究員高校部会では、これまで生徒の思考力・判断力・表現力等の育成を確実に図るために、授業の在り方や学習の過程における評価の工夫について、また学習活動を活性化させる学習評価の在り方を検討してきた。

平成 25 年度の商業部会では、「思考力・判断力・表現力等を育むための授業実践と学習評価の提示」という研修主題を設定し、思考力・判断力・表現力等を育むための具体的な授業実践の研究及び明確な評価規準・活用方法についての研究を行った。その結果、言語活動を意図的・計画的に指導することの重要性が明らかとなった。具体的には、評価票を活用した授業実践による学習指導と学習評価を一体的に行うことで、思考力・判断力・表現力等が確実に身に付くことが検証された。

一方で、「生きる力」を育むためには、生徒自身が学習活動を振り返り自分を見つめる活動を通して、自己評価を正しく行う能力を高めていくことが更に必要であるいう結論に達した。

本部会では、これまでの研究結果に基づき、現状の商業の指導及び評価を以下のものとした。

1　生徒が自らの考えを導き出せるよう指導する必要がある。
2　商業の各分野において、生徒が主体的に考え表現することを重視した指導が必要である。
3　筆記試験や技能試験等による評価に加え、思考力・判断力・表現力等を、多面的に評価できる手法を取り入れていくことが必要である。

特に自ら考え、発表することを通して自分の言葉で表現する学習活動と、その評価規準について研究することを目的として、「自らの考えを導き出し表現する学習活動とその評価方法の工夫」を研究主題とした。

Ⅱ　研究の視点

1　言語活動を意図的、計画的に指導することに重点をおいた授業の工夫

授業で得た知識や技能を活用することを目的に、記録、要約、説明、論述、討論などの言語活動へ取り組むことにより、表現力やコミュニケーション能力、論理的思考力等が養われ、その結果、思考力・判断力・表現力等が育成される。しかしながら、各科目の特性や各校の生徒の状況に違いがあることを考えれば、どのような言語活動を意図的、計画的に指導することが適切なのかについては単一ではない。

本部会では、どのようにすれば授業で得た知識や技能を活用し、効果的に思考力・判断力・表現力等を育成することができるのかについて、ワークシートを活用して自己評価を正しく行わせることで自らの考えを導き出し表現する学習活動について研究し、例示する。

２　評価方法の工夫

知識や技能の到達度を図るために、定期考査などを活用した定量的な評価が一般的に行われているが、言語活動を行った結果養われた思考力・判断力・表現力等を、ワークシート等の課題への取組状況による定性的な評価について、その重要性は認識されているものの、具体的な評価規準や評価方法に関する事例があまり多くない現状が見受けられる。

そこで、定性的な評価について、自らの考えを導き出し表現する学習活動をどう評価するのか、また具体的な評価規準をどう示すか研究し、例示する。

Ⅲ　研究の仮説

本部会では、これまでの議論を踏まえ検討した結果、思考力・判断力・表現力等を育むためには、自らの考えを導き出し、表現する学習活動とその評価方法の工夫が必要であると考え、次の仮説を立てた。

１　基礎的・基本的な知識と技能の習得を徹底することにより、自らの考えを導き出す学習につなげることができる。

２　事例を活用して生徒にとって分かりやすい内容を授業で取り扱うとともに、学習の到達目標を示すことで自己評価を正しく行わせ、主体的に思考し判断する力を育むことができる。

３　生徒に学習活動の評価規準を明確に示すことで、思考力・判断力・表現力等を育むことができる。

検定試験対策などで陥りがちな知識・技術習得型に偏重することなく、生徒の思考プロセスを記述させるワークシートを取り入れることで生徒が自身の思考を導き出し、振り返ることを可能とし、体験したことや学習したことを説明したり活用したりといった生徒の言語活動等の活性化を図ることができると考えた。また授業前後に評価規準について共通認識をもつようにすることで、学習評価を意図的・継続的に実践することが可能になると考えた。

Ⅳ　研究の方法

本研究では、生徒の思考力・判断力・表現力等を伸長させるために、授業における指導と評価を一体化させる工夫をすることで、生徒の思考力・判断力・表現力等の伸長につながる言語活動に取り組んだ。日常の授業の中で、その授業内容の学習目標、理解すべき学習内容や、各段階における達成ポイントなどの評価事項を生徒と共有し、学習に取り組ませることで確かな学力を身に付けさせることができ、結果として思考力・判断力・表現力等を伸長させることができると考えた。具体的方策として、商業の各分野において授業をするに当たり学習内容と評価事項を明記したワークシートを作成し活用することで、生徒の思考力・判断力・表現力等を育むことができると仮定し検証授業を実施した。

１　ワークシートに学習目標と学習内容を示すことで、主体的に学習する意欲を高める。

２　ワークシートに学習目標の達成に向けた思考プロセスを記述させ、生徒自身に思考の過程を把握させることで､更に興味関心を高め主体的に思考し判断する力を育むことができる。

３　生徒に客観的な評価規準を示すことで、思考力・判断力・表現力等を育むことができる。

Ⅴ　研究の内容

１　研究構想

全体テーマ　**「思考力・判断力・表現力等を高めるための授業改善」**

高校部会テーマ　**「思考力・判断力・表現力等を育むための指導と評価」**

現状と課題（生徒の思考力･判断力･表現力等についての現状を分析し、課題を抽出する）

【現状】

（１）検定取得指導などの知識・技術習得型の指導が中心で、自ら考え、発表するといった思考力・判断力・表現力等を育むことを意識した指導の取組が十分でない。

（２）課題解決に向けた応用力及び主体的に学ぶ姿勢を育成することができていない。

（３）思考力・判断力・表現力等を評価する客観的な規準を示すことができていない。

【課題】

（１）自らの考えを導き出す意欲を高める指導をする必要がある。

（２）商業の各分野において、生徒が主体的に考え表現することを重視した指導が必要である。

（３）筆記試験や技能試験等による評価に加え、思考力・判断力・表現力等を、多面的に評価できる手法を取り入れていくことが必要である。

商業　部会主題

自らの考えを導き出し表現する学習活動とその評価方法の工夫

仮　説

（１）基礎的・基本的な知識と技能の習得を徹底することにより、自らの考えを導き出す学習につなげることができる。

（２）事例を活用して生徒にとって分かりやすい内容を授業で取り扱うとともに、学習の到達目標を示すことで主体的に思考し判断する力を育むことができる。

（３）生徒に学習活動の評価規準を明確に示すことで、思考力・判断力・表現力等を育むことができる。

具体的方策

（１）ワークシートに学習目標と学習内容を示すことで、主体的に学習する意欲を高める。

（２）ワークシートに学習目標の達成に向けた思考プロセスを記述させることで、主体的に思考し判断する力を育むことができる。

（３）生徒に客観的な評価規準を示すことで、思考力・判断力・表現力等を育むことができる。

評価･検証

ワークシートの記述内容及び検証授業前後に実施するアンケートの集計結果から、生徒の変容を読み取り評価・検証を行う。

２　思考力・判断力・表現力等を伸張させるためのワークシートの活用

商業の各分野において、達成目標を含めた学習内容の全体像と評価項目を生徒が共有できるワークシートを作成し､生徒がグループ学習活動で思考したプロセスをワークシートに記述し、振り返りが行えるようにした。以下の各検証授業で生徒の思考力・判断力・表現力等を伸長させるためのワークシートの活用方法を示す。

３　実践事例

(1)　実践事例Ⅰ「簿記」（２年次）

本事例は、固定資産に関する内容を授業で取扱い、授業の学習目標と学習内容及び客観的な評価規準を生徒へ事前に示し、学習目標の達成に向けた思考プロセスをワークシートを作成し記入せることで、学習目標を具体的に把握させ、主体的に試行し判断する力を身に付けさせ、思考力・判断力・表現力等を育む授業実践である。具体的な学習内容は、学習活動の評価規準に基づき生徒が主体的に固定資産の具体例を調査し、その結果をグループ活動において情報の共有や意見の集約を行う学習活動である。

【学習指導案】

教科名	商業	科目名	簿記	学年	第２学年

ア　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

単元名：「固定資産の取引」

使用教材　教科書（新簿記【実教出版】)、ＩＣＴ機器

イ　単元（題材）の指導目標

・固定資産の意味と取引きについて明らかにする。

・固定資産を取得したとき、不要になって売却したときのそれぞれの記帳方法について理解させる。

ウ　単元の評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　技能	エ　知識・理解
・固定資産の勘定科目ついて関心をもち、理解できない内容は自分で調べるなど、主体的に課題に取り組もうとしている。	・固定資産の取得、減価償却及び売却に関する取引を簿記特有のルールから考察し、その特徴を自ら表現することや、適切に判断し仕訳をしようとする。	・固定資産の記帳に関する基礎的･基本的な技術を身に付け、各種帳簿に合理的、能率的に記録・計算・整理できる。	・固定資産の記帳に関する基礎的・基本的な知識を身に付けるとともに、固定資産の種類と意味及び固定資産台帳の役割を理解する。

エ　単元（題材）の指導と評価の計画（３時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点				評価規準・評価方法
		関	思	技	知	
1時間目（本時）	・ 固定資産の意味と勘定科目の種類について理解する。 ・ 固定資産の各勘定科目について、その具体例をインターネット等で調査する。	● ●	● ●			・ 調査に対して主体的に取り組み、より多くの具体例を探そうとする姿勢が見られる。 ・ 具体例を考察し、その共通点について自己の見解を示している。
2時間目（本時）	・ グループを編成し、グループ内で各自の調査した具体例を共有する。 ・ グループ内で、各勘定科目の特徴を端的に表現するとどのような言葉が妥当か検討する。 ・ 検討結果をグループの代表者が発表する。		● ●	 ●	 ●	・ グループ活動において、自己の疑問点などを、会話を通して解決しようとしている。 ・ 固定資産の各勘定科目の違いを、自らの言葉で表現できる。 ・ グループの考えを集約して相手に伝わるように発表することができている。

オ　本時（全３時間中の２時間目）

(ｱ)　本時の目標

固定資産の意味と種類について、自ら考え明らかにする。

(ｲ)　本時の展開

＜１時間目＞

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	10分	・ 本日の学習目標と固定資産の定義と種類を理解する。 ・ ワークシートの評価規準について理解する。	・ 指導内容については、プレゼンテーションソフトを用いて説明を行う。 ・ 説明終了後、教科書p147 を開き、消耗品との相違について触れる。	・ 本時の目標と固定資産の定義を理解している。【ア】
展開	35分	・ インターネット検索機能を使って、「建物」、「備品」、「車両運搬具」、「土地」について、それぞれ具体的物品名と、どのような特徴があるのかをワークシートに記入する。	・ 活動前に「備品」「建物」「車両運搬具」についての定義を明確に理解できるように具体例を挙げて指導する。	・ 個人ワークにおいて、多くの具体例を挙げている。具体例から、自分なりの見解を考えられている。 【ア】【イ】

まとめ	5分	・ 本時の内容を振り返り、ワークシートをまとめる。	・ ２時間目は、１時間目の調査内容をグループで共有した上で、各勘定科目の特徴について、分かりやすい表現を検討していくことを伝える。	・ 本時の活動内容をワークシートに書き込むことができている。【ウ】【エ】

＜２時間目＞

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	10分	・ 班単位でアイスブレーキングを行い、班活動で意見交換ができるよう、雰囲気作りを行う。	・ アイスブレーキングは、協力性の高いアクティビティで行う。	・ 班内で積極的に意見交換ができている。【ア】
展開	30分	・ それぞれの調査した内容及び考察結果について各自発表を行う。聞き手はワークシートへ記入する。 ・ 「建物」、「備品」、「車両運搬具」、「土地」の各具体例において、各勘定科目内で共通していることは何か意見を出し合うとともに、それぞれの勘定科目の特徴ついて、一言（30 文字以内）で表現する。	・ すでに他の班員から出された具体例であっても、発表するよう指導する。 ・ 出された具体例が、実社会でどのように使われているか、班員全員に共有できていることを確認するよう指導する。	・ グループワークにおいて、自らの意見や疑問などを表現できている。【イ】【ウ】 ・ 勘定科目の特徴を、他の班員に理解できるよう表現の工夫ができている。【イ】【ウ】
まとめ	10分	・ ワークシートを活用する前と、今とでは、固定資産に対してどう理解が深まったか記載する。	・ 自己が感じたことを、なるべく多く書き綴り、ワークシート記入を増やすことを心がけるよう指導する。	・ 固定資産の勘定科目について、その違いを解釈しようとしている。【イ】【ウ】

カ　本時の振り返り

(ｱ)　学習評価

検証授業の実施前は、日頃の知識と技能の習得を中心とした受動的な学習活動中心の指導を行ってきていたため、生徒が主体的な学習に適応できるか危惧していたが、検証授業開始時に教材提示装置で本日の授業で行うべきことを明確に示すことで、主体的に自らの考えを発

ワークシートにおける学習内容の明示

Work１　「建物」、「備品」、「車両運搬具」、「土地」の具体例の調査する。それぞれの具体例に共通した特徴を書く。
Work２　他者の調査結果を記録し、疑問点を見つける。
Work３　それぞれの勘定科目の特徴を一言で表現ための文言をグループで検討する。
Work４　この学習前の学習後で、固定資産に対してどう理解が変わったか、それぞれのワークを行った際の感想にふれながら説明する。

【図表：学習目標と学習内容の明示内容】

表することに主眼を置いた授業を実践することができた。

また、４月の授業開始以来、各単元終了時に生徒の知識及び技術の定着を確認テストにより把握してきた。今回の検証授業終了後も仕訳問題 10 題による確認テストを実施し、他の単元の確認テストの平均点と比較し、13 名の生徒が思考力・判断力・表現力等を育む検証授業後の確認テストにおいて平均点が高くなり、今回の取組で基礎的な知識・技術の定着も図れることが確認できた。

(ｲ)　検証授業の検証

この検証授業が、研究構想図の具体的方策に基づき授業が行われたのかを検証するため、９月の単元「手形取引の記帳」の確認テスト実施時と、10 月の単元「固定資産の記帳」の確認テスト実施時に、同じ研究構想図の具体的方策に基づいた授業が行われているか、質問紙を用いて生徒へ調査を行った。具体的な質問項目については、部会で検討を重ね設定したものである。また、回答方法については四件法とし、「４とてもそう思う」、「３ややそう思う」、「２あまりそう思わない」、「１全くそう思わない」の選択肢を設けた。調査結果から、すべての質問項目について、単元「手形取引の記帳」と比べ平均値が上がっていたことから、この検証授業が従来の授業と比べて、具体的方策をより実現している授業であったことが考えられる。

検証授業「簿記」質問紙質問項目

質問１　先生から授業の目標や内容について、明確に示されましたか。
質問２　意欲的に学習できましたか。
質問３　指導内容をただ覚えるだけでなく、授業内容について、「どうして」、「なぜ」と考える教育活動はありましたか。
質問４　授業を通じて、「自分の力で考え選択する」大切さを実感することができましたか。
質問５　先生から毎回の授業の評価について、明確に示されましたか。
質問６　授業を通じて、「記録すること」、「まとめること」、「説明すること」の大切さを、実感することができましたか。

【図表：質問紙質問項目】

	単元「手形の記帳」終了時					単元「固定資産」終了時				
	選択肢「4」の数	選択肢「3」の数	選択肢「2」の数	選択肢「1」の数	平均値	選択肢「4」の数	選択肢「3」の数	選択肢「2」の数	選択肢「1」の数	平均値
質問1	11	2			50.0	12	1			51.0
質問2	3	10			42.0	7	6			46.0
質問3	7	4	2		44.0	10	2	1		48.0
質問4	2	8	3		38.0	6	7			45.0
質問5	4	5	4		39.0	7	4	2		44.0
質問6	3	9	1		41.0	9	4			48.0

平均値は、質問ごとに、「4とてもそう思う」を4点、「3ややそう思う」を3点、「2あまりそう思わない」を2点、「1全くそう思わない」を1点とし、点数合計を回答者人数（13人）で割ったものである。

【図表：検証授業　調査結果】

(ｳ)　仮説の検証

基礎的・基本的な知識と技能の習得を確実に行わせるため、本年４月の授業開始以来、授業終了時に毎回課題を課し授業内容の理解度を確認する取り組み、定期考査の他に知識と技能の習得の程度を詳細に把握するため毎月１回以上の小テストの実施、小テストの結果から

習得が進んでいない生徒に対しての補習を行ってきた。本授業においては、ワークシートの評価項目の中に、「自らの考えを他人に伝えることができる」及び「自分自身の考えをもつことができる」を設定し、ワークシートへの記載から定量的に評価を行った。その結果、平素の平常点及び定期考査及び小テストの結果等の成績が優良の者と、本授業のワークシート評価の点数が高い者がほぼ一致した。このことから、仮説通り、基礎的・基本的な知識と技能の習得を徹底することにより、自らの考えを導き出す学習につなげることができると考えた。

今回の授業では、固定資産の説明について、教科書や補助教材等の内容説明に終始せず、生徒が固定資産に関する勘定科目について調査し、各自の調査結果を持ち寄り、グループワークの中で調査結果を活用し、互いに固定資産の理解を促す取組を行った。グループワークの到達目標を事前に示したワークシートの授業感想欄の記載内容を分析したところ、インターネットでの調査や他者の調査結果の聞き取りにより、受動的な授業形態では知ることができなかった事実や考え方を知ることができ、授業内容について理解を深めることができた。また、教科書には載っていないことを探究する姿勢が身に付いたとの感想が、多くの生徒のワークシートに書かれていた。このことから、仮説どおり、事例を活用して生徒にとって分かりやすい内容を授業で取り扱うとともに、学習の到達目標を示すことで主体的に思考し判断する力を育むことができた。

(ｴ)　生徒の変容

仮説の検証結果から明らかになった生徒の変容は、学習の到達目標を生徒に示した上で、生徒にとって分かりやすい事例を授業で取り扱い、生徒が自ら課題解決に向けて調査し、生徒相互で調査結果を伝え合うことで、生徒に主体的に思考し判断する力を育むことができた。その際、平素より基礎的・基本的な知識と技能の習得を徹底されているほど、より主体的に思考し判断する力が育まれることが明らかになった。また、生徒に学習活動の評価規準を明確に示すことで、学習の到達目標に到達するためのプロセスが理解しやすくなることから、より意欲的に学習活動へ取り組む姿勢が高まった。従って、研究構想図の具体的な方策に基づき授業を行うことで、思考力・判断力・表現力等を育むことができる。

(ｵ)　今後の課題

知識・技能の習得だけではなく、思考力・判断力・表現力等の育成する授業改善及び指導と評価については、仮説の検証から、基礎的・基本的な知識と技能の習得の徹底が主体的に思考し判断する力を育むことに影響していることが分かり、基礎的・基本的な知識と技能の習得をどう徹底するかという課題に帰結することが分かった。今後の課題は、知識・技能の習得を図りながら、同時に思考力・判断力・表現力等を養う授業をどう展開していくのか、単元ごとに具体的な指導方法や評価方法を研究していく必要がある。

(2)　実践事例Ⅱ「情報処理」（１年次）

本事例は、ソフトウェアの活用に関する知識と技術の習得とともに、一つのテーマで継続的に考察・まとめ学習を通して思考力・判断力・表現力等を育むことを目標として実践した。学習指導要領上の情報処理では「ビジネスに関する情報を収集、処理、分析し、表現する知識と

技術を習得させ」と示されていることから、本授業では表計算ソフトウェアの使用知識と操作技術の習得に取り組んできた。本事例はこの取組と並行して思考力・判断力・表現力等を育むことを目的に、授業の学習目標と学習内容及び客観的な評価規準を生徒へ事前に示し、生徒がテーマに沿って与えられたデータや自ら探し出した資料を基に考察する機会を設けた。思考した過程を記述するワークシートを用意し記入させ、分析結果をグループ内で検討し合う活動と報告書を作成させることで、生徒の主体的に学習する意欲を高めるとともに、思考力・判断力・表現力等の育成を図った。

【学習指導案】

教科名	商業	科目名	情報処理	学年	第１学年

ア　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

単 元 名：ビジネス情報の処理と分析

使用教材：教科書「情報処理」（東京法令出版）

イ　単元の目標

・表計算ソフトの特徴を理解し、活用するための基本的な知識を身に付ける。

・表計算ソフトでデータを処理するための基本的な操作、関数の利用ができる。

・グラフの種類と特徴を理解し、目的に応じたグラフを活用することができる。

ウ　単元の評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　技能	エ　知識・理解
・表計算ソフトに興味をもち、積極的に操作しようとしている。	・図表から判明することを基に思考を進め、的確な分析を行うことができる。 ・思考、分析した結果を自分の考えとして表現することができる。	・与えられた図表から様々な事項を読み取り、まとめることができる。	・表計算ソフトの特徴、操作方法を理解している。

エ　指導と評価の計画（10 時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点				評価規準・評価方法
		関	思	技	知	
10時間目 第8・9（本時）・	・条件の判定と件数のカウントから順位付けや表の検索といった発展的な関数を用いて表を作成することができる	●	●	●		・与えられたデータから自主的に内容を読み取り、まとめることができている。

	・ 与えられたデータから読み取れる事項をまとめ、表とグラフを作成する。		●	●	●	・ データを基に目的に応じ、適切な操作方法を選択し表を作成することができている。
	・ 本時の内容を振り返り、ワークシートをまとめる。		●	●		・ 自分の考えを分かりやすい文章でまとめることができている。

オ　本時（全 10 時間中の９時間目）

(ｱ)　本時の目標

テーマパークの年間入場者数ランキング結果から相違点を読み取り、その結果からそれぞれの特徴について考えられることをまとめ、表と適切なグラフを活用して相手に伝えることができる。

(ｲ)　本時の展開

課程	時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 （ア～エ）
導入	５分	・ 前時の内容を復習し、本時の目標を把握する。	・ 教科書のページを明示し、課題を明確に把握させる。	・ 授業に臨む準備ができている。【ア】 ・ 本時の学習内容を理解している。【イ】
展開①	15 分	・ テーマパークの年間入場者数ランキング結果をみて、自分の考えをまとめる。 ・ グループで話し合い、ワークシートに記入する。 ・ グループごとに出た意見について発表する。	・ ランキングに入っているテーマパークの中で知らないものがあった場合、検索するよう指示する。 ・ それぞれのテーマパークの強みについて考えるように促す。 ・ グループで出た意見についてもワークシートにまとめさせる。	・ インターネット上から必要な情報を的確に収集し、理解できている。【イ】【ウ】 ・ 調べた情報について思考を進め、自己の考えをワークシートに表現できているか。【ウ】 ・ 発問に対して積極的に発言することができている。【イ】【ウ】
展開②	25 分	・ テーマパークの年間入場者数ランキング結果を使い、表とグラフを作成する。	・ データからどのグラフを使えば分かりやすく表せるか考えるように促すとともに、表とグラフがＡ４用紙１枚で収まるように作成するよう指示する。	・ 適切なグラフを選択でき、Ａ４用紙１枚に収まるよう作成できている。【イ】【ウ】【エ】
まとめ	５分	・ 次時の学習予定を伝える。	・ 本時の学習内容を再度確認し、次時の予告をする。	・ 本時の学習内容を理解できている。【エ】

カ　本時の振り返り

(ｱ)　学習評価

検証授業を実施する前に第８時間目にExcelの関数を取り扱う時間で生徒に口頭で学習目標を伝え、ワークシートを使用せずに教科書の内容を一斉に実習する形式で授業を行い、アンケートを実施した。具体的な質問項目については部会で検討し設定したものである。回答方法については「４とてもよく思う」から「１全くそう思わない」の四件法である。受動的な学習活動が中心であったためか、③考える学習活動があったか、⑥記録すること、まとめることの大切さを問う項目についての結果が他の項目に比べて低くなっていた。

本検証授業では２学期の授業を通して調べ得た知識やグループ学習を通してまとめてきた５枚のワークシートを使用してＡ４サイズで１枚の報告書をまとめた。作成形式を含めた報告書の作成についてはプリント上で詳細を示した。また、評価についても生徒が評価規準について明確にが分かるよう工夫した。多くの生徒が授業時間内でまとめ上げることができなかったが、放課後等を活用して報告書を作成するなど、積極的な姿勢が見られた。

情報処理授業に関するアンケート項目

今日の授業を振り返り、以下の質問について「４：とてもそう思う」、「３：ややそう思う」、「２：あまりそう思わない」、「１：全くそう思わない」のいずれかを必ず選択して答えてください。

	質問項目	回答欄
①	先生から授業の目標や内容について、明確に示されましたか。	４　３　２　１
②	意欲的に学習することができましたか。	４　３　２　１
③	指導内容をただ覚えるだけではなく、授業内容について、「どうして」、「なぜ」と考える学習活動はありましたか。	４　３　２　１
④	授業を通して、「自分の力で考え選択する」大切さを実感することができましたか。」	４　３　２　１
⑤	先生から今日の授業の評価について、明確に示されましたか。	４　３　２　１
⑥	授業を通して、「記録をすること」、「まとめること」、「説明すること」の大切さを実感することができましたか。	４　３　２　１

【図表：部会で検討したアンケート項目】

(ｲ)　仮説の検証

今回の検証のために、３つのワークシートを使って学習内容をまとめさせるとともに、ワークシートを使った授業の振り返りを行ってきた。生徒自身が活動の自己評価を行うとともに、授業者があらかじめ示した①解答をきちんと記入できている②自分の考えを記入できている③全ての項目に記入できている④誤字・脱字が無い⑤課題テーマを理解できている、の５観点で評価を行い、各プリントにコメントを入れて返却をしてきた。

生徒の自己評価において項目②、④以外で「△」をつけた生徒はいなかった。このことか

ら生徒自身は自ら考え、その内容を表現することができたと概ね感じていることが分かる。報告書作成以外では授業時間中の 15 分程度でワークシートの作成をさせていたため、ワークシートに振り返りの項目を設定し生徒相互に伝え合いをするよう仕組みを作ったが、その時間を個人の調査内容を互いに伝える時間に活用するよう具体的に指示していなかったことから、「②周囲と協力して学習することができた」、「④発表や発言をすることができた」という項目については自己評価の結果に差がでてしまった。しかし、他の項目については三分の二程度の生徒が「◎」と評価をつけている。このことからワークシートに振り返りの部分を設け、評価規準を示すことで生徒が主体的に学習に取組、思考力・判断力・表現力等を育むことができた。

キ　生徒の変容

検証授業後に作成した報告書を班ごとに相互評価した後、もう一度第８時間目に行ったアンケートと同じものを実施し比較した。その結果、「②意欲的に学習できたか」の質問項目に対して否定的な回答をした生徒は２名で、その他は肯定的な回答であった。また、検証授業後には他人の意見を取り入れて自分の理論を再構築するなどの様子が見られた。この結果から基礎的・基本的な知識と技能の習得を徹底し、学習目標と評価項目を明確に示し課題に取り組ませることで、思考力・判断力・表現力等を育むことができた。

ク　今後の課題

今回の検証授業の結果、情報処理の知識、技能を活用し表現させることで、効果的に思考力・判断力・表現力等を育むことができることが分かった。今後は、確実な基礎的な知識、技能の定着を図るとともにグループ活動等の自分の考えを他者に伝える機会を意図的に多く設けていくことが思考力・判断力・表現力等を育むためには必要である。今後さらに、課題解決型学習（以下、「アクティブラーニング」と呼ぶ）の取組について具体的に検討する必要がある。

(3)　実践事例Ⅲ　「マーケティング」（２年次）

本事例は、「生徒にとって身近で分かりやすい企業の具体的事例」という視点の下、A社の特定保健用食品である緑茶飲料の市場への導入期を題材にしたものである。

ここでは、その事例をもとにワークシートを用いた、グループ学習による討論や話し合いなどのアクティブラーニングを充実させ、思考力・判断力・表現力等の伸長を図ることを大きな目標とした。

【学習指導案】

教科名	商業	科目名	マーケティング	学年	第２学年

ア　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

単元名：第５章「製品計画」

使用教材　教科書（マーケティング【実教出版】）

イ　単元（題材）の指導目標

・製品計画の内容を体系的に把握させる。

・製品政策の意味と種類を理解させる。

・製造物責任の考え方と製造物責任法における無過失責任の考え方を理解させる。

・企業の社会貢献活動について理解させる。

ウ　単元の評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　技能	エ　知識・理解
・消費者のニーズを把握し製品化に関心をもち、その意欲と態度が身に付いている。 ・製造物責任の考え方に関心をもち、その意欲と態度が身に付いている。	・ヒット商品について、その理由を考察し、そのことを文章で記述し、表現できる。 ・製造物責任法における無過失責任について説明することができる。	・対象となる顧客のニーズの把握方法や、製品化された後の市場の動き、他社の動向、それらに対する対応策について具体的に把握することができる。	・新製品開発の４点の内容（新製品の開発、既存製品の改良、既存製品の新用途の開拓、既存製品の継続的な生産）を理解し、企業のマーケティング活動について理解できる。

エ　単元（題材）の指導と評価の計画（８時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点				評価規準・評価方法
		関	思	技	知	
５時間目（本時）	・「特定保健用食品」の表示許可を得た商品を市場に定着させる事例から、新市場創造のために企業として考えるべき経営戦略について、グループワークを通じて学習する。	●	●	●		・市場ができていないところを新規開拓する際の重要事項や視点について、グループで意見交換ができる。

オ　本時（全８時間中の５時間目）

(ｱ) 本時の目標

Ａ社の特定保健用食品である緑茶飲料の市場への導入期を題材に、新製品による新市場は想定する顧客層に、購入する気持ちになる「事実」と「情報」の周知徹底が重要であることをグループ内の話合いから導き、その話合いの中で自らの考えを明らかにする。

(ｲ) 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	10分	・すでに学習したＢ社の事例と今回学習する緑茶飲料について、市場のニーズの視点を理解する。	・緑茶飲料の商品仕様は無糖であり、機能性や付加価値を備えておらず、商品価格を上げる理由がないものである。にも関わらず、「トクホ」の機能性を付与したことで高価格での販売に成功したものであることを伝える。	・すでに学習したＢ社の事例の特徴を理解している。【ア】

展開	35分	・グループに分かれＡ社の緑茶飲料を試飲し、味、匂い等の特徴を把握し、「美味しさ」を売りにすることはできないことを実感する。 ・ワークシートを完成させるため、グループ内で話し合いを行う。その中で自分の見解や意見を表現する。	・グループで意見を出し合う際の大切な約束事である「他人の意見を否定しない」ことを指導する。 ・マーケティングの答えは企業と商品によってすべて異なる。ビジネスの答えはひとつではないことを伝える。	・個人ワークにおいて、多くの具体例を挙げている。【イ】 ・具体例から、自分なりの見解を考えられている。【イ】【ウ】
まとめ	５分	・グループごとに発表し本時の内容を振り返り、ワークシートをまとめる。	・他の人の発表で、自分の視点になかった内容は、ワークシートにメモを取らせる。	・ワークシートを使って正しく自己評価ができている。【ア】【ウ】

(ｳ)　教材観

すべての企業は製品（商品・サービス）から収益を上げる。企業はいかに製品のライフサイクルを長くできるかに知恵を絞る。既存製品のライフサイクルに合わせて最適なマーケティングを行いながら、いつか寿命がくる既存商品に代わる新製品を生み出す必要がある。本授業では、教科書第５章「製品計画」の指導の中で、生徒に身近な具体的な新製品開発と新市場の創造について取り上げることで、思考力・判断力・表現力等を育むための指導の充実を図る。

カ　本時の振り返り

本検証授業を行うにあたり、今までの授業の流れ、継続性を大切に考えて授業を実施した。マーケティングという科目は、商業の中でも特に生徒にとって身近で分りやすい事例を扱うことができ、それだけ、生徒の意欲・興味・関心を引き付けることができる科目である。そこで、本時の始めに「本時の学習内容」を黒板に示し、さらに別紙のワークシートを配布し、学習内容を生徒に明確に伝えた。このワークシートを利用してグループ学習を行った。その際、すでに学習した内容との関連や、考え方なども理解できるようにワークシートの項目を工夫した。

質問項目	指導と評価のポイント
１.普通の緑茶と比較して成分の違いは？	・ラベルの成分表示から考えさせる。
２.色の違いは？	・色の濃さの違いを実感させる。
３.美味しさ、味の違いは？	・試飲して「かなり苦い」けっして「美味しくはない」ことを実感させ、通常の緑茶飲料のような「美味しさ」を売りにはできないことを実感させる。
４.Ｂ社のビール飲料がビール市場に参入した時と、Ａ社の緑茶飲料が緑茶飲料市場に参入した時とでは、どんな違いがありますか？	・以前に学習したＢ社のビール飲料のような市場の潜在的ニーズを丁寧に掘り起こして商品化したものではない。すなわち、市場ニーズがあったものとないものとの違いを理解させる。そのことが、結果として販売促進方法の違いにも表れてくるため、十分に理解させる必要があると考える。 ・また、この違いが、通常の飲料品と違い、売上の奪い合いにはならずに、緑茶市場全体の売上を上昇させることにつながったことを理解させるうえで必要な前提知識となる。
５.このＡ社の緑茶飲料は市場の隠れたニーズを丁寧に掘り下げて製品開発されたものですか、それとも違いますか？	・４の問いと関連している。 ・自分なりの根拠をもって述べることができているか。
６.この特定保健用食品Ａ社の緑茶飲料を市場で売り出す際、導入期に企業として何をすることが大切だと考えますか？あなたがＡ社緑茶飲料のマーケティング担当者だとして考えてください。	・市場に問題意識をもたせ、メタボリックシンドロームが健康を害するものであり、その対策としてＡ社緑茶飲料が有効であることを市場に対して浸透させることが必要であることを理解させる。
７.この緑茶飲料を発売したＡ社にとって、飲料事業は初めてだったため､販売チャネル(どこで売るか）を持っていません。 製品とチャネル(販売する店)の相性を考えて話し合ってください。(Ａ社の緑茶飲料を最初にどこで販売し始めて、販売実績を作りますか？)	・既に飲料事業を行っている企業ならば販路と販売先　をもっている。それに対して本事例のＡ社は飲料製品の販路をもっていない。そこで販売する製品の容量ひとつとっても､「どこで販売するか」という販売チャネルを想定しないと確定できないことを考えさせる。(例）量販店で販売するならば 1.5ℓから２ℓのペットボトルで販売できる。それに対して、コンビニエンスストア（ＣＶＳ）ならば 350～500ml がちょうどよいことを理解させる。 ・Ａ社の緑茶飲料は発売当初は関東甲信越のＣＶＳに限定して販売し、その後順次商圏を拡大していくチャネル戦略を採用した。

【図表：マーケティングワークシート】

アンケート質問内容
Ｑ１　マーケティングの授業では様々な企業の具体的事例を取り上げていますが、授業内容に興味・関心をもって授業を受けることができていますか。
Ｑ２　上記Ｑ１の理由について教えてください。（自由記述）
Ｑ３　今回のＡ社の緑茶飲料の授業について、話の内容に興味・関心は持てましたか。
Ｑ４　グループで話し合いをする形式は、あなたの授業に対する興味・関心を高めることにつながりましたか。
Ｑ５　グループ学習はあなたの学習内容の理解に役立ちましたか。
Ｑ６　今後もグループ学習を、単元ごとに実施することについてどう考えますか。（自由記述）
Ｑ７　Ｂ社のビール飲料の市場への参入と、Ａ社緑茶飲料の市場参入の違いについてあなたは理解できましたか。
Ｑ８　マーケティングワークシートで学習のポイントを示しましたが、あなたの学習内容の理解に役立ちましたか。
Ｑ９　ワークシートや、グループ学習、学習内容の共有、本日の授業目標を共有することは、学習内容の理解に役立っていますか。
Q10　定期考査で毎回出題している論述式問題について答えてください。あのような論述式の試験は、高校２年生のあなたにとって役立っている。または、将来役立つものと考えられますか。
Q11　上記Q10 の理由を書いてください。（自由記述）
Q12　その他自由意見　（自由記述）

【図表：アンケート質問内容】

キ　仮説の検証

マーケティングの授業を通じて生徒の思考力・判断力・表現力を向上させるために、科目の特性を生かし､生徒にとって身近な企業の事例を題材として授業を行った｡その事例を用いて、今まで学んだ学習内容を基に、自らの考えを導き出し、文章として説明できるための指導につなげた。この単元を終えた後、仮説の検証として、生徒にアンケート調査を行い次のことが分かった。

(ｱ) Ｑ１から生徒にとって身近な企業の具体的事例を取り扱うことについては 48.6%が肯定的意見を示しており、否定的な意見は 11.4%であった。また、Ｑ３から今回の検証授業で扱った事例については 40%の生徒が肯定的意見であり、否定的感想は 22.9%であった。また、自由記述欄からも生徒が主体的に興味をもっていることがうかがえる結果となった。これらの集計数にはＣ（普通）と回答した生徒は含まれていないため、仮説（２）でいう事例を活用することで生徒にとって分かりやすい授業となり、主体的学習につながるものであるということができる。

(ｲ) Ｑ４・Ｑ５からグループ学習によるアクティブラーニングについては、数字として大きく積極的・肯定的感想は得られていない。ここで注目すべき点は否定的感想をもっている生徒がＱ４では約３割、Ｑ５では２割と比較的高いことと、その理由が表れているＱ６である。どのグループでグループ学習を行うかが大きく、この点については今後の課題であるといえる。

(ｳ) ワークシートで学習内容、目標、思考プロセスの記述による効果についてはＱ８から積極的解答が 37.1%、否定的解答が 14.3%であった。この回答結果からもワークシートを的確に用いた学習活動は有効であることが分かった。

(ｴ) 表現力を定期考査の論述問題を通して力を付けさせることについてはQ10 から、否定的解答が 14.3%と低く、45.7%もの生徒が肯定的意見であるということである。さらにその理由について、自由記述であるにも関わらず、Q11 で多くの生徒が記述し、その内容が極めて積極的であったことである。また、Ｑ９で 35 名中 27 人（77.1%）の生徒が仮説に基づく具体的方策について効果があり役だっていると感じている点である。よって仮説の有効性があるということができるものである。

ク　生徒の変容

授業と定期考査の論述問題を接合させ、事例から分かった事柄を論理的に論述する方法を授業で取り入れたことで生徒の意欲に変化が見られた。このことは特にQ11 とQ12 から見られる。論述問題は苦手な生徒が１学期には多かったが、Q10 から否定的解答が５名（14.3%）と低く、Q11 の自由記述欄には本質的に学んだことを人に伝えるための手段として、文章で表現する力が必要であることを理解している回答が多かったことである。

さらに数名ではあるが、学んでみたいと思う意欲がある生徒が教室内に出てきている。

ケ　今後の課題

どのような授業でも全員が積極的感想をもつことはなく消極的意見の生徒もいる。消極的意見や取り組む力が低い生徒をどのようにして授業にひきつけるかが大切である。今回のアンケートから、私は授業を担当する者として「学びというのは知識を吸収することだけではなく、その学習過程で得られたものすべてが学びなのではないか」ということに気付かされた。それは、Ｑ６のグループ学習のアンケートの中で、「授業の中で行ったグループ学習を通じて真面目に考えを述べ合ったことで、相手の今まで気付かなかった一面を知り、友達になれた」という記述を目にしたときに感じたことである。「何を学ぶか」だけではなく学習の途中経過も含めて「何を得られるか」が大切なのだと感じた。この点が思考力・判断力・表現力等を育む上でグループ学習やアクティブラーニングを行う意義なのではないかと感じることができた。今回の一連の検証授業を通じて明らかとなった課題は次のとおりである。

(ｱ) グループ学習を行う際には、どのグループで活動するかが重要である点。あまり意欲的でない生徒と興味関心をもち意欲的な生徒とを同じグループで活動を行っても、前提となっている基礎知識に大きな違いがあり、効果的な意見交換につながらない可能性が大きい。

(ｲ) 学ぶ意欲がない生徒をどのように興味・関心を惹きつけ、授業に向かわせることができるかが課題である。

(ｳ) 定期考査と日々の授業を有機的に結び付け、定期考査を通じて文章による表現力を育成することができるものと考える。この点についても商業の各科目を通じて育成されるべき力であると考える。

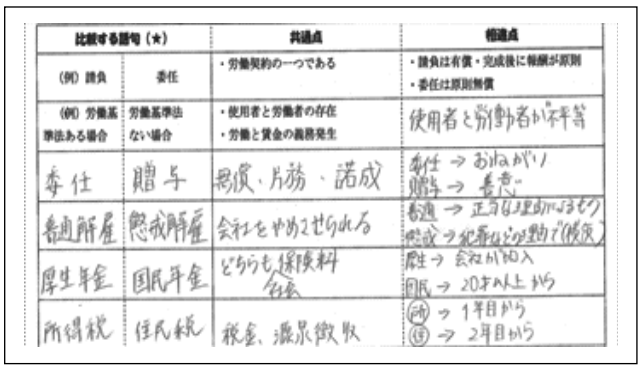
(4)　実践事例Ⅳ　「経済活動と法」（３年次）

ア　商業科目における、思考・判断・表現する学習活動

授業での具体的方策として、授業で用いるワークシートの工夫にあると考えた。現場で生徒の実態を把握しながら、既存のものでなくオリジナルワークシートを作成することは大変有効であることはこれまでも研究されてきているが、今回の課題においても、ワークシートの工夫を追求した。思考力・判断力・表現力等を育成する工夫をふんだんに取り入れるワークシートの工夫ができないか、思考力・判断力・表現力等を養うために必要なスキルアップを図れるようなワークシートに試みることができないか、以下の２点について授業を行い、思考力・判断力・表現力等を育むためのワークシートを作成し、授業の中で計画的に取り入れた。

【図表：「語彙力 UP シート」一部】

１点目としては、「語彙力」アップをねらった「語彙力 UP シート」を作成し活用した。商業科目のどの分野、どの単元においても、基礎的・基本的知識をしっかり理解した上で、それを表現するには（または、伝える、コミュニケーションをとる）、語彙力が必要である。語彙力がなければ、思考も表現もすることができない。単純な書き込み作業シートであるが、そこで基礎的・基本的な知識の習得・徹底にもつながり、語彙によって思考を深め、語彙力・表現力を豊にする前提になると考えた。授業において、プレゼンテーションを行い、討論を行うといっても、専門用語も含めて、語彙をきちんと理解し、自分のものとして、語彙を自然に用いるようにならなければ、議論の中身が深まることはない。一方、語彙を理解していることは、生徒によって思考を深め、発表の場面で自信をもった態度としても現れ、伝える相手によっても適切に表現することが期待できる。



【図表：「比較力 UP シート」一部】

次に２点目であるが、さらなる思考力の育成のために、「比較」という概念に注目してみた。思考するといってもその方法は様々である。したがって、思考力とは、その方法を組み合わせ、多面的に用いて、内面で論理的に深めるきわめて高度な知的活動である。

その思考力を育成するためには、まずは思考の方法、パターンを改めて学習することが必要である。これまで日本の小・中・高等学校の教育において、意識的に思考の方法論を学ぶ機会は乏しかったのではないだろうか。「考えてみなさい」といわれても生徒は戸惑うばかりであると考えた。そんな問題意識から、比較して考察してみる時間を授業において展開していく方法を考えた。具体的には、学習した内容・事例を様々な観点や角度から比較検証させるワークシートを活用した授業を試みた。ICT の機器で、比較例を提示し、その内容の事例と相違点を考

察させる。左の図のような「比較力 UP シート」を活用し、生徒に実際に比較させてみることにより、相違点ばかりではなく、共通の問題点が浮き彫りになるという点にも気付かせることができる。これにより、メリット・デメリットは何か、あるいはどちらの方がどのようによいか、などを判断できる思考過程を体験、学習できる。いわゆる「見える化」をさせながら、思考する方法、判断をしていく態度を養うことができる。また、授業の最初と最後に、課題を課すことで授業を通して、自分の考えがどう変わったかについても省察することもできる。

また、「語彙力」と「比較」という授業で行った後で、表現力も身に付ける学習を展開する。ここでは「第三者に伝える（口頭）」と「小学生に分かりやすく伝える（文章）」に分けて行った。指導体制としてはＴＴで行う。担当教諭ではない教員（または、発展的には社会人などの活用に発展させたい）に学習した内容をしっかり伝えられるか、評価も合わせ、生徒が自ら表現すること、伝えることの体験的な学習になる。また一方の文章力と工夫が必要となる小学生へ伝える課題もその難しさも体験的な学習となる。思考・判断した内容をどう表現するかという今回の課題に対して一つの方法であることは検証授業を行っても手応えを感じた。

イ　思考力・判断力・表現力等の評価とその工夫

思考力・判断力・表現力等の評価は、テストの点数による定量的評価と異なり、主観的評価になりやすい傾向がある。担当教員一人によると評価が偏る可能性が高まる。より客観的な評価を追及することが、思考力・判断力・表現力等を身に付けさせる指導においては重要になる。可能であれば学校外部の教育力を活用し評価してもらう機会を設けると良い。企業や人材コンサルティング会社と連携し生徒のプレゼンテーションについて評価判定を依頼すると、より客観的な評価になる。また、生徒にとってもプレゼンテーションを社会人に評価してもらう貴重な機会となり、よりよい緊張感をもつ経験につながるだろう。また、小学生や中学生に対して分かりやすく説明する機会（発表会など）をつくることで、伝えたい相手に応じて言葉を選びながら、説明を組み立てることが必要となり、その結果、思考力・判断力・表現力等を育むことができる。

一方、生徒自らが評価する自己評価や、生徒相互での相互評価もあるが、単に生徒が自己の理解度や達成度を何段階かで〇印を付けるような、いわゆる「振り返りシート」では、評価の規準が不明瞭になってしまう。前述のような口頭での説明や文章で記した説明によってどのように伝わったのかを具体的にアンケート調査することは、総合的な評価として有効である。

【学習指導案】

教科名	商業	科目名	経済活動と法	学年	第３学年

ウ　単元（題材）名　使用教材（教科書・副教材）

単元名　社会生活に関する法　「労働と法」　労働に関する一般法

使用教材　教科書（経済生活と法【実教出版】自作教材　ＩＣＴ機器

エ　単元（題材）の指導目標

・労務に関する契約として雇用・請負・委任があること、それぞれの社会生活上の意義や特徴などを理解させ、さらに身元保証・事務管理に及ぶ学習を目標とする。

・学んだ知識をより身近な生活としてとらえ、思考・判断・表現力を育む学習を目標とする。

検証事例１　思考力・判断力育成のためのワークシートの導入

・２枚のワークシート（語彙力ＵＰ・比較力ＵＰ）を１セットとし、書き込む作業によって学習の振り返りと語彙力の育成及び思考力（比較検討する力）につなげる。

検証事例２　表現力育成のための実践（説明）と評価（他者からの感想等）

・相手に伝えることの大切さ、伝わった時の喜びを体感させる。
（教員以外の第三者に口頭で説明し、感想をもらう）

・学習前・学習後において、同じ問題を解答させ、どのような変化があるか比べる。伝えたい相手（説明したい相手）に対してどのように表現できるか。（小学生に文章で説明し、感想をもらう）

オ　単元の評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
・労務に関する学習に興味関心をもち、積極的に学ぶ姿勢が見られる。 ・板書をノートにしっかり取るなど基本的な学習活動をすることができる。	・労務に関する契約に関心をもち、自らすすんでワークシートに取り組み、疑問点などを積極的に質問することができる。 ・労務に関する語彙を確認し、法律・事例等と結び付け、より理解を深め考察しながら表現することができる。	・正しい楷書体で丁寧にワークシートを記述することができる。 ・質問に対し、根拠と思考プロセスを踏まえ、口頭で答えることや簡潔な文章で表現することができる。 ・他の生徒と協力し、より多くの知識を共有することができる。	・身に付けた語彙、知識を活用することができる。 ・語彙の違いを適切な言葉で説明することができる。

カ　単元（題材）の指導と評価の計画（６時間扱い）

	学習活動	評価の観点				評価規準・評価方法
		関	思	技	知	
３時間目（本時）	検　証　事　例　１ ・語彙力ＵＰシートを教科書、ノート、学習プリントを参考にしながら出来るだけ多く書き出し、「労働に関する一般法」で学んだ語句を再確認する。	●	●	●		・前回までの授業で新たに学んだ語句、法律用語を積極的に書き出すことができ、語句の読み方、正しい漢字などを意識しながら丁寧な楷書体で書き出すことができている。

	・上記のワークシートから２つの語句を抜粋し、共通点相違点について簡潔な文章で比較力ＵＰシートに記述する。	●	●	●	●	・より深い知識を身に付けるために、語彙の比較について教科書、授業ノート資料を活用し、簡潔に文章にまとめることができている。また、他の生徒と相互に疑問点など積極的に解決しようとする意識をもてている。
４時間目（本時）	検　証　事　例　２ ・教員及び、教員以外の第三者からの質問に対して語彙力、比較力シートをもとにしながら口頭で説明する。(インターネットの使用・電子辞書も可)	●	●	●		・相手からの質問に対し、理由となる根拠を明確にしながら、より分かりやすく伝えるためにはどうしたらよいか、思考し、学んだ語彙力、比較力を基にしながら、インターネットの活用ができている。
	・小学生の質問に対して、どのように答えればよいか学んだ知識を基に思考し、文章を作る。			●	●	・あらかじめ提示された小学生からの質問に対して理由となる根拠を明確にしながら、相手をイメージして文章を書くことができている。

キ　本時（全６時間中の３・４時間目）

(ｱ)　本時の目標

語彙力・比較力といった思考・判断の基礎となる学習を積極的に取り組むことができる。

(ｲ)　本時の展開・・個人で思考することを主とした学習の時間

＜３時間目＞【語彙力 UP シートの活用】

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準 (ア～エ)
導入	10 分	・本時の学習目標の提示と説明ワークシートに予め記載してある記入例を参考に学習の進め方を理解する。	・２枚のワークシートの必要性、関係性を理解させる。	・２枚のワークシートの内容を理解し整理することができている。【ア】

展開	35分	・出来るだけ多くの語句を書き出す作業を進める。	・正しい楷書体で出来るだけ多く書き出すことと、意味があやふやなものはメモを取ることを指示する。	・学習として最も基礎基本である語彙力の向上に積極的に取り組むことができている。 【イ】【ウ】【エ】 ・正しい楷書体で丁寧な文字で記入できている。 【ウ】
まとめ	５分	・本時の内容を振り返り、記入したワークシートを他の生徒と交換し、補足しあう。	・２枚のワークシートを回収し、特に、優れた記述について、後日紹介できるようまとめておく。	・語彙力を付けることの意義を理解し、達成感を感じることができている。 【イ】【ウ】

＜４時間目＞【比較力 UP シートの活用】

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準 (ア～エ)
導入	10分	・本時の学習目標の提示と説明ワークシートに予め記載してある記入例を参考に学習の進め方を理解する。	・２枚のワークシートの必要性、関係性を理解させる。	・２枚のワークシートの内容を理解し整理することができている。 【ア】
展開	35分	・語句と語句の比較、もしくは有無の違いなどを、簡潔に文章にまとめる作業を進める。	・しっかり考えながら出来るだけ簡潔に記述すること。とくに相違点について思考を深めるよう指示をする。	・語句の比較ができ、語彙の違いについて正確に表現することができている。 【イ】【ウ】【エ】 ・正しい楷書体で丁寧な文字で記入できている。 【ウ】
まとめ	５分	・本時の内容を振り返り、記入したワークシートを他の生徒と交換し、補足しあう。	・２枚のワークシートを回収し、特に、優れた記述について、後日紹介できるようまとめる。	・語彙力をつけることの意義を理解し、達成感を感じることができている。 【イ】【ウ】

Ⅵ　研究の成果

「高等学校学習指導要領」によると商業における教科の目標は、「商業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、ビジネスの意義や役割について理解させるとともに、ビジネスの諸活動を主体的、合理的に、かつ倫理観をもって行い、経済社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる。」とされており、商業は、ビジネスの諸活動を教材として経済社会の発展を考えることができる教科である。この意味で、商業教育はビジネス教育であるということができる。

商業教育の学習は、経営能力を高めるための学問でもある。これらの科目を学ぶことで、学んでいない者と比べて経営能力が増すような教育を目指す。思考力・判断力・表現力等を高めるために、これらビジネスの世界で起こっている経営問題を事例として取り扱い、考えさせる教育を行い、企業経営上の意思決定のポイントを反復させることでビジネスに対する能力が飛躍的に高まると考えた。

本部会では、指導上のポイントとなる点や、理解させるときの思考の各段階を生徒に示し、指導内容に関する情報を共有することで、生徒の思考力、判断力を高めることにつながっていくと結論付けた。正確な知識を確実に身に付けることで、有機的に他の知識と結び付き、それらが大きな知識に発展し、結果として自信をもって表現できるようになるのであると考えた。

問題演習が中心になりがちな商業の各科目であるが、全ての検証授業で、実社会での具体的事例の調査や、グループワークを取り入れるなどの工夫が必要であることが分かった。その取組により、生徒間で積極的に意見を出し合い、事例について考察しようとする姿勢や、教科書の内容についての理解を深め、教科書には載っていないことを探究する姿勢を身に付けさせることができた。

グループ学習においては、ワークシートに思考プロセスを記述させ振り返りを行えるようにすることで、効果的に自己の考えを相手に伝えるなど言語活動の充実を図ることができた。

また、ワークシートに育成すべき思考力・判断力・表現力等の評価項目を明記することで生徒の言語活動を活性化させることができた。

Ⅶ　今後の課題

本部会は今年度、授業を通じて生徒の思考力・判断力・表現力等を伸長させるための授業実践について研究を行った。仮説の通り本検証授業では、基礎基本の充実と、身近な経済活動をを事例として活用することで主体的に考えさせ、更に「この単元ではこれができるようになることが大切である」という評価項目を明確に示し、生徒に学習内容の全体像を把握させることで、学習内容の理解や、思考が深まると考えて取り組んだ。

また、授業にグループワーク等のアクティブラーニングを取り入れることで、生徒間で意見を述べ合い、出し合った意見をまとめてグループとしての発表までつなげることができ、結果として言葉による表現力の育成が図られると考えた。

検証授業においては、各科目、各単元に応じたワークシートを作成し生徒に授業内容の理解を深めさせ、意図的に生徒間の議論や発表を取り入れることで言語活動の充実を図った。その

結果、学習内容に興味・関心をもち、積極的に自分の考えを述べることができるなどの変容が見られ、一定の思考力・判断力・表現力等を育むことができた。

しかし、いくつかの問題も浮かび上がってきた。その点については以下の点が今後の残された課題である。

1　グループ学習においては、一定の変容や興味・関心を高めることができたものの、アンケート結果からは、生徒の意欲や関心により取組の成果に大きな差があることが分かった。基礎学力が定着していない生徒や、勉強に対して意欲を示さない生徒にとっては、グループワーク等による思考力・判断力・表現力等を育む学習効果は薄い傾向がある。今後は、更に取り扱う題材、方法等について検討する必要がある。

2　思考力・判断力・表現力等の育成については、グループ学習により自分の考えを口頭で伝え合うことについて一定の成果があったが、口頭のみではなく文章による表現力の育成を商業教育の中でどのように育むかという点については明確に示すことができなかった。高等学校で学んだ基礎的、基本的な知識や技能を実社会の中で活用するためには、文章により相手に伝える表現力も求められる。今後は、日常の授業の中で実際の経済活動における諸問題を理論的に論述できるようワークシートを改善し、文章による表現力の育成を図る必要がある。

平成２６年度　教育研究員名簿

高　等　学　校　・　商　業

学　　校　　名	課程	職　名	氏　　名
都立第四商業高等学校	全日制	主幹教諭	◎對馬　秀男
都立若葉総合高等学校	全日制	主任教諭	○桜井　伸一
都立千早高等学校	全日制	主任教諭	永井　文子
都立江東商業高等学校	全日制	主幹教諭	持丸　裕紀

◎　世話人　　○　副世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事　　西牧　豊実

平成２６年度
教育研究員研究報告書

高等学校・商業

東京都教育委員会印刷物登録
（平成２６年度第１８６号
平成２７年３月）

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８４９
印刷会社　正和商事株式会社

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。